
インフィニット・ストラトス～孤高の一夏～

フィム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラatos／孤高の一夏／

【Zコード】

N4333R

【作者名】

フィム

【あらすじ】

行方不明になった一夏は最強の力を手に入れ発見される
孤高の強さを得た一夏は徐々に変化し他者を圧倒する存在になつた。

設定（前書き）

更新速度は遅いですが見ていくてください

設定

織斑 一夏

性格

雲雀恭也（家庭教師REBORN）の性格が若干まるくなつた感じ
人が群れても咬み殺しはしないが無言のプレッシャーを与える
一応誰にでも優しい

好きな物

小動物 笑顔 怯える顔 桜

嫌いなもの

泣き顔 五月蠅い人間 人が多い場所 自分を強いと思っている弱
い人間

概要

幼い頃に行方不明になり役2年後に見つかる
行方不明時に家庭教師REBORNの世界について雲雀恭也に鍛えて
もらひ性格まで似てしまった。

原作よりあっさりとした性格で基本は怒らない……と言つより人に
あまり興味をもたない

雲雀恭也から貰つたトンファーは常に持ち歩いており、雲のリング
とボックスは隠している

普段怒らない故一度怒りの沸点に達すれば気が済むまで咬み殺し続
ける

小動物が大好きで小動物のコスプレをしている人間がいれば男女問

わざ拉致る危険人物

戦闘スキルは高い、勿論戦闘狂
慣れ親しんだ友人には天才的なバカと呼ばれることがある

機体説明

名前 紫雲しづく

武装

トンファー × 2

自立機動兵器『球針』 × 4

腕部拘束用兵器『ロール』 × 2

概要

突然あらわれた男に渡されたI.S

不明な点が多いが一夏の専用機になる

武装とその名前は雲雀恭也のボックス兵器からきていく

腕部拘束用兵器『ロール』はシールドエネルギーを消費すれば増殖する

自立機動兵器『球針』はボディ四力所に砲口が搭載され4つを合体させると名の通り円上に針があるようになり360°。砲撃が可能一夏の脳波で動く

トンファーに積まれた特殊技能『ヌーヴオラ』によりシールドエネルギーを吸収して自分のエネルギーに変換する
そしてトンファーには様々な隠し武装があり『剣』『ライフル』『鎖』『ニードル』が搭載されている

カラーは紫色でヌーヴオラを発動した場合橙色になる

クラスメイトは全員女その一（前書き）

早速一話投稿しました。

読者の期待に応えれるよう頑張ります
それと一話じと半分にします

しかし設定だけで役2000アクセスとは
…

クラスメイトは全員女その1

おかしい…どこで僕は間違ってしまった？

僕は幼い頃、師匠に鍛えてもらつて、面倒をかけているIS関係で働く姉のボディガードにでもなろうかと考えつつ藍越学園に向かつた。

恐らくここで間違つたんだろうと僕は思う

師匠なら絶対こんなヘマはしないし師匠がいたら僕が殺される
だけどそれより今の状況の方が嫌だ

「君たち…僕は動物園のパンダが何かなのかい…？」

僕の殺意混じりの発言でクラスの全員が実質固まつた。

IS学園…まあISは基本女性しか機動できない欠陥兵器
なのに僕がここにいる理由

それは『興味本位でISを触つたら起動した』…實に馬鹿らしい話
しだよ

つまり教室を通り越してこの学園の生徒は皆女子

唯一人男の僕がいるのが珍しいからその視線』には『納得するしか
ない

けど僕はすべてにおいて人が多い所が嫌いで学校も嫌い
5人以上集まつていたら僕に取つて迷惑千万でしかない

「あつ、あの、織斑君…？自己紹介してもらえるかな？」

「…………」

僕の殺意に怯えつつ僕に自己紹介を求める副担任の山田真耶
名前は覚えやすいからいにけど本当にこの人は見た目含めて教師な
のか疑いたくなる

黙つて視線を向けるとヒツと怯える、原因は僕だけ見てるこっち
は頭が痛くなる

「……織斑一夏」

一番前だからよく解らないけどたぶんクラス全員がポカーンとして
いると思う

何故なら田の前の山田副担任がそんな表情をしているからだ。

僕は必要最低限の情報しかださない主義もあるけど正直めんべくせこ
できることなら田差しを浴びて寝てみたい

「それだけですか……？」

山田副担任の言葉に同意なのか一人を覗くクラス全員に『もつと何
か言つてよ』みたいな視線が僕に向けられる

「……好きな物は小動物、以上

僕が言い終えて後ろを見ると背後から若干の気配が近づいてなにかを振り上げる音を感じて、隠し持っていたトンファーで防ぐ

「お前はもう少ししまともな自己紹介をできないのか馬鹿者」

「それよりも僕が武器を持つことに驚かないんだ」

僕が防いだ物は出席簿らしき物

そしてそれで僕を叩こうとした女性は黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているが過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。僕より鋭い吊り目

間違いない僕の姉、織斑千冬本人だ

僕はトンファーをしまい席につく

誰も驚かないことに逆に僕が驚いたよ

「諸君、さつきは私の愚弟が迷惑をかけたな

私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。

私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。

出来ない者には出来るまで指導してやる。

私の仕事は弱冠一五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな

……「オ、これは驚いた。

いきなり姉弟つてことをバラし始めたよ
特に最後の『逆らつてもいいが、私の言つことは聞け。いいな』は
矛盾しまくりだ。要は逆らうなと言えば早いのに、しかし。教室は
黄色い声援が響いた

「キヤ—————！千冬様、本物の千冬様よー！」

…………うん

「ずっとファンでした！」

これは……

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんですー北九州からー！」

変態が多い……と解釈をしてしまいかねないが間違いではない気が
するよ

特に最後の、千冬さんは僕の姉であつて君の姉ではないし、ビニ
から來たとか興味ないから

「あの千冬様に『」指導いただけるなんて嬉しいですー。」

「私、お姉様のためなら死ねますー！」

じゃあ最後の君死になよ、少なくとも不機嫌オーラを放つ姉のために

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

たぶんどのクラスもそうだとと思うけどあれかな？これだけ馬鹿者つてもしかして僕も入ってるわけ？ねえ……それは嫌なんだけどそれにその反応は逆に興奮させるだけだと思つんだけど

「きやあああああー！お姉様！もつと叱つてー・罵つてー・」

「でも時には優しくしてー・」

「やしてつけあがらないようこそ見てー・」

……もつこつそ死んでしまえと黙つた
なに今の？

ねえ？これ僕じゃなくても怒つていこよね？そして最後のは本当に

つけあがらなこよつに殴み殺すみ?」のクラスおかじこの?.

「その辺にじる鷹鹿者

そろそろ私の愚弟が怒りかねん」

「もしかして……織斑君いつもの千冬様の弟……?」

「…………何バラじてるの?」

「ああ……それと愚弟を婿にしたいなら私を倒してからじり

……訂正、どうも僕の姉までおかじこよつだ
しかも無視したし

はあ……僕はびづなるのやら

クラスメイトは全員女その一（後書き）

すいません、たぶん皆さんは『性格全然違うだろ……』と思つている気がします

しかしそれでも続きを待つてくれる人がいれば嬉しいです

クラスメイトは全員女その2（前書き）

前回に比べてクオリティが下がっている気がしますので注意してください

今回結構原作から離れます

読んでくださる方、感想をくれた方ありがとうございます

クラスメイトは全員女その2

「はあ……疲れた」

僕はついさっきまで女子達の質問に答え続けていた。相手が男なら容赦なく咬み殺していたけど相手は女子、さすがに手を出すわけにはいかないから千冬姉さんに今晚一緒に寝ると言った瞬間、女子に『質問は放課後にしろ』の一言でこの地獄から脱することができた。

唯一つ問題なのが『一緒に寝る』って言った後の千冬姉さんの視線が獲物を狙う獣のような感じになってしまっていること

「昔は風呂も一緒に入っていたな……あれ? その頃からも……だよな……?」

ダメだ……冷静になれ、冷静さを欠いた奴が死ぬ……よし

「ふあああ

そう言えば篠は千冬姉さんとどこに行つたんだろ?

それにエリのデータ収集を彼に頼んで……復習でもしておこうか

「ちよっと、よろしくて?」

「…………」

見た目からして厄介だね、いかにもお嬢様みたいでプライドが高そ
うで……咬み殺したくなるじゃないか

「訊いてます？お返事は？」

「ふああ……」

お嬢様らしき人物が僕の机を叩いてキーキー騒いでいる
君は盛つた猿かなにかじやないのかな？

「で……？君は僕にようがあるの？それと君だれ？ついでに君は喧
嘩の対象にならないからね」

「わたくしを知らない？」このセシリニア・オルコットを？イギリスの
代表「黙りなよ」ツ！」

僕はセシリニアとか言う草食動物に殺氣を向けていた。

「イギリス代表候補生……？笑わせないでよ、国一つで威張らないでよ…相手が女性でも咬み殺すよ」

僕はトンファーを構える

弱い癖に強く見せて偉そうにする……やつには許せないね

「なつー。」

「弱い君には無理だと思つけど、決闘でもするかい？クラス代表者を決める時に」

僕の発言で草食動物——もといセシリア・オルコットの闘争本能に火をつけたらしく

「いいですわーもしあなたがわたくしに負けたら奴隸にしますわよ

奴隸…ね、多少楽しめる相手ならいいけどとにかく雑魚しかいな
いから…楽しませてもらつよ

「ふうん、じゃあ僕はハンデとしてシールドエネルギーを50%から始めるよ」

僕の発言で今度はクラス全体がざわめく

確かあの草食動物の I.S は確かに遠距離仕様、名前は忘れたけどイギ

リスト第三世代型

恐らく無謀だと思われてるね…不快だ

「男が女より強いだなんて、この国の殿方はジョークセンスがあるのね」

どうもこの草食動物は大きな勘違いをしているらしい
本当の強さは男も女なんて些細なものでしかなく関係ない
本当の強さは最強の名に相応しい人間が持ち弱い者を守る
それが『強さ』

「僕は冗談はあまり言わない主義ですね……」

僕はトンファーをしまい教室を出ようとすると草食動物が僕の前に
立ち、邪魔をする

「……何?」

「どこのへ行く気ですか? まさか授業をサボる気ですか?」

「僕がどこに行こうと君には関係ない

じゃあね草食動物「

僕は足早と教室から出て、ある場所に向かう『僕に接触を求める男』が指定したポイントへ

「君かい？僕を呼んだのは」

僕が呼ばれたのは廃工場、しかもご丁寧に工場から半径1Km以内は人が入らないようにしている
つまり特殊な力をもつ人間か権力を持つ人間
まあ僕にとつてはどうでもいいことだけど

「ねえ…隠れてるのはわかってるから出てきてくれないかな…？咬み殺すよ」

「サスガダナ、オリムライチカ
サスガヒバリキヨウヤノデシトイツタトコロカ」

変成器…？声で人物を特定は出来ないけど雰囲気はあの連中に似ている、だけど何故師匠の名を…？

「で……僕に何かあるなら早くしてくれないかな？」

「ソウアセルナ、オマニワタスモノガアル」

「渡す物……？」

黒い服に顔を包帯で巻いて隠した男が紫色の宝石がついた指輪を僕に投げる

「これは……？」

「ソレハオマエノアイエス『紫雲』ダ

これが僕のIS……紫雲

しかもこの指輪

「オリジナルの雲のボンゴレリングと同じ形

「ソウダ、オマエノシショウデアルヒバリキヨウヤーメイレイサレテナ、サイシンエイノギジュツヲアツメタキタイダ」

「それは」苦労様なことだね……まあ有り難く戴いておくよ

師匠が僕の為に……あの人そんな柄じゃないのに

「ヤクメハハタシタカラオレハカエラセテモラウゾ」

「そう……君の名前は？」

「ソウダナ……『アンリマユ』トナノラセテモラオウカ」

そう言ってアンリマユは消えた。

彼……中々面白そうだね

「で？ 姉である私に何か……言ひことはないのか？」

「すみませんでした」

僕が学園に帰つてみると何故か混乱状態に陥っていた。

千冬姉さんが差し向けた僕を監視していた諜報部の人間から僕が消えたと報告があつたらしく国家的に問題になりかけていた。

「まったくお前は……100歩譲つて授業をサボることを黙認して

も勝手にいなくなるな、唯でさえ世界的に重要人物なのに……下手をしたら軍まで動くぞ」「

「それは『苦労様』ことで、でも僕は『何ものにもとらわれることない孤高の浮き雲』だからね、それにエスを受け取りに行ってたんだから許してよ」

僕の言葉に千冬姉さんの眉に皺がよぎった

「アノとんでもスペックで世界の科学者が理論上及び現実的に『有り得ない』とまで言われたあの機体をか

「うん、まだ完全にそしていいけどシールドエネルギーが尽きたら生命エネルギー……つまり命で動く『LES（Life Energy System）』を搭載するプロトタイプの機体『紫雲』ある意味出鱈田だよ」

僕は千冬姉さんに出されたコーヒーを一口飲む
因みにここは寮長室でこの情報は僕か千冬姉さんが言わない限り外に漏れない

「私としては弟をそんな危険な機体に載せたくないのだがな」

「無理言わないでよ百式のコアが破壊されて雪片式型が中破、世界中の剣職人が修理と強化している今、僕の動きと力に対応できるのが『紫雲』だからね」

「そんなのどうだって良い、私は弟が無事なら国一つ滅んでも構わん」

……ワオ！僕の命が国レベルにまでなつてしまつたようだ。
たしか去年は47都道府県が46都道府県になつてもいいとか言ってたけど、これは姉が重病だ
女好きで千冬姉さんが汚されないか不安だけど腕は確かな医者を呼んだほうが良い気がするよ

「僕はこんな所で死ぬ気はないさ
それに僕は『強い』からね、それと『紫雲』の設計図は世界中に回つたんだよね」

「……？ああ、だが造るのは無理だからとうあえず設計図は貰いたい……とか」

「じゃあイギリスはその最先端技術の夢のロボの出鱈目な機体ね最初の練習相手になるわけだ。首相が泣いて喜んでいるのが田に浮かぶよ」

正確には今にも血を吐きそうなぐらい胃を痛めてストレスで頭が沸騰しそうな首相が……だけど

「やめてくれ、その内首相の自殺が絶えなくなる」

千冬姉さんが溜め息混じり頭を抑える

「それは面白そうだね、イギリスの【ブルー・ティアーズ】中国の【甲龍】フランスの【R・リヴィア・イヴ・カスター】ドイツの【シユヴァルツェア・レーゲン】の4機を相手にする以上に……ね

「…………しかしクラス代表者決定の為に鬭つとはな……正直聞いたときは疑つたぞ」

あれ？無視された？まあいいや

「うん、今の内にあの草食動物を潰しておかないとその内壊れてしまう

そうなつたら僕でも救いようがない」

「なるほどな……優しいのか厳しいのかわからないな」

「それが僕さ……それより授業は良かったの？」

今は放課後だけど確かに書類の為に3限の途中から抜け出して変わりに僕が作ったゲームをやらせたって言つたけど大丈夫なの？たしかあのゲーム脳波で動くシステムだけど敵のレベルを僕用に設定してから大変だと思つけど

「教師としては駄目だが下手をすれば国家を揺らす一大事になりかねないからな」

「……ああ、部屋ひとつあるの？今日はここでも良いとして僕の部屋がないし」

「そうだな……ずっと此処でもいいが個室を用意しよう、それまで悪いが『アイツ』の部屋を使つてくれ」

「……最悪だ」

千冬姉さんが言つ『アイツ』は僕に唯一一度だけ勝利した天才少女『織斑 緋也』^{ひなり}もとい『平泉 緋也』は婚約者を名乗る『I.T.K.H ランキング（一夏的危険な人ランキング）』3年連続不動の王者そして趣味が僕のストーカーと僕が使用した割り箸とストローの回収と盗撮で特技は僕の下着の色を当てる変人だ

「あの僕の写真だけの部屋にいけど」

「……すまない」

360。おはようからおやすみまで僕の写真で包まれた空間に誰が好き好んで……ましてや本人が行くと思う?

「私は少し仕事が残っているからまた出るが夕食までに帰つてくる」

「行つてらつしゃい」

僕が認めた天才4人の内3人（姉含む）が変人なのは何故だろう
まあ…頑張ろうかな、守る為に

クラス代表決定戦ーその1（前書き）

今日は3つに分けたいと思います

今回の話は……見てのお楽しみで

来ててくれた方と感想を書いてくれた方、ありがとうございます

クラス代表決定戦！その1

「ねえ 篠……」

「…………」

「何で無視してるの？僕泣くよ？」

僕は師匠ほど心は強くない、ここは食堂…しかし周りを見れば女子
だらけで居心地が悪い

女子にあまり免疫がない僕はこの状況で知り合いが第一人だし無視
されたら本当に泣きかねない

「約束……破つた」

「は？」

「放課後私と練習すると約束しただろーー！」

「あー…………」めん、ちょっと国家的問題だったから

あの後寮長室で各国家に送る書類をやつしてたからね

「今日の放課後空けとくか?」

「……約束だぞ」

「うん」

しかしいじの和食美味しいな……彼の腕には多少筋肉が入るけど、やはり辺りの定食屋より美味しい

「ねえねえ、彼が噂の男子だつて~」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」

「えー、姉弟揃ってJS操縦者か。やっぱり彼も強いのかな?」

これも一向に変わらぬ気配がない
やはり珍しいのか一定の距離を保つつつ僕に興味ありますよ~
的なる視線を向けてくる

「お、織斑くん、隣いいかなつ？」

「いいよ」

僕がそう言つと3人は小さくガツッポーズをしていて周囲は妙なざわめきが聞こえた。

食事ぐらう誘えれば付き合つのこ

「それにしておりむー結構食べるんだね～」

「のほほさんもお菓子ばかり食べていたらダメだよ

しかし昨日は疲れた……早い内に紫雲をテストさせないとね

「こつまで食べていろーー食事は迅速に効率よく取れー遅刻したらグラウンド十週をせぬべーー」

ああ…丁度いい時に現れたね

「丁度いい所にいたな織斑、政府から『紫雲』のテスト運転をしき
…………だそだ」

「へえ……それは面白そうだね、国の専用機を潰せないのは残念だけど……久々に楽しそうだ」

「えー…おりむー専用機持りますのー?」
「すー」「

「

「一夏…舌なめずりは止める、見ていくつちが怖い

「つて言つた織斑くん、誰と闘つの?」

「僕だよ

僕の言葉でその場にいたみんなが固まった。

と言つより千冬姉さんは知つてると思つたんだけど

「言い方が悪かったね、正確には僕が造つた擬似ISで僕のデータ
が入つている仕組みだよ

擬似 I.S.『VONGOLA』とは久々に闘うから楽しみだな

世界の重鎮がこのI.S.学園に集まつた。

余程僕のI.S.の性能を見てみたいらしい

「ふう……始めようか」

僕の指輪が輝き、I.S.が起動し、無駄のないスマートなフォルム
そして薄めの灰色の装甲に2つのトンファー
これはあくまで『起動実験用』だから精々

「織斑……そろそろ出る」

はあ……碌に思考させてくれないのかな?
まあいいけど

「織斑 一夏』紫雲』…行きます

ピット・ゲートのカタパルトからアリーナに射出される

「相手は隼人さんか」

僕から約200M離れた位置に大型のライフル『G・アーチャーヴ
er・X』を構えた火力特化装甲の『VONGOLA Ver.テ
ンペスター

ボンゴレファミリー10代目沢田綱吉の右腕、獄寺隼人モ^デル
あの草食動物のISタイプと同じだから予習になる、しかもVN
GOLAはランダムで撲ばれているからよほど僕の運は良いらしい

「行くよ」

『紫雲』に搭載されたトンファーを構えた瞬間、赤いビームのマシ
ンガンが僕を襲う

「くつ……厄介だ」

スラスターを全力で使用し大きな動きで翻弄し徐々に接近し一撃を
与える

「かみじりッ」

トンファーの一撃をくらった装甲が赤く光り、爆発する

「つ……」

爆風をトンファーで払いのけ、VONGOLAを見据える

「（あつちはまだG・アーチャーと瓜を使ってないのにこの様か）
『紫雲』、第一戦闘形態に変更、追加武装無しで『ヌーヴォラ』の
使用時間を1分に設定」

《第一戦闘形態に変更、追加武装変更なし
『ヌーヴォラ』システムロード中
制限時間を1分に設定》

灰色の鎧が紫色に変化し、スラスターが2つ追加される
正直勝てる可能性が低いけどやるしかない

「咬み殺す」

僕はトンファーを投げて注意を逸らし一瞬でVONGOLAの背後に
に周り背部スラスターに片方のトンファーで殴りつけてシステムを
発動させる

「ヌーヴォラシステム発動！！」

「咬み殺す」

片方のトンファーでひたすら殴りVONGOLAのシールドエネルギーを吸収し『紫雲』のシールドエネルギーに変換する

『エネルギー40%吸収及び変換率100%』

「これでッー！」

マズい……腰部スラスターからアレが！！

『敵腰部から自立機動兵器反応確認』

「仕方ないか」

僕はトンファーで追撃をかけたが自立機動兵器『瓜』の赤い砲撃が6ヶ所から放たれる

『エネルギー170%低下』

Nuvola System Timelimit 0:23』

「ぐわ……」

残りのエネルギーが少ない…先にトンファーを回収して…

「グチャグチャに咬み殺す」

僕の意志に反応するかのように鎧の色が変化し始める

「これば……？」

《第一戦闘形態モード（インファイタ）》

鎧の色が紫色から金色に変わつエネルギー残量が と表示される

「面白いね……」

僕はトンファーの仕込み武器の一つ『剣』を発動させゾンゴーAに突撃する

「咬み殺す！！」

僕はVONGOLAの左腕を斬り、右足を突き刺す
VONGOLAはG・アーチャーを僕に構える

「させない」

VONGOLAのG・アーチャーver・Xの砲撃と同時に僕はトンファーでG・アーチャーver・Xを突き刺した。

「はああああああ！……！」

僕は砲撃を斬つて銃口を折り、加速をしながら周りを飛び頭部、体、腰部を斬りつける

「これでッ！」

あと一撃をいれれば僕の勝ちだ……そう思った瞬間、僕の目の前にモニターが表示され、敗北を意味するブザーが鳴る

『モード終了』、エネルギー残量0%LES不可能の為戦闘不可と

判断』

「……へ？」

僕は今啞然としている
は……？エネルギー切れ？
嘘……だよね、だつてあと一撃なの」「……

「…………そんな」

僕がこんな……ミスを、初步的なミスをしてしまうなんて

周りを見るとみんな啞然としていた。

僕が……負けた。こんな情けない負け方で
漫心ともあつたし油断もしていたのもあつたかもしれないけど……

「…………クツ」

こんな形で負けるなんて……！

クラス代表決定戦ーその1（後書き）

そう言えばブルーティアーズってラノベだと中距離って書いてあったけどアニメだと遠距離って言っていた。
やっぱ大人の事情でそうなったのかな？

クラス代表決定戦その2（前書き）

長らく放置してすいませんでした。
事情でケータイが使えませんでした
21時になつたら次話を投稿します

クラス代表決定戦その2

「まあ……一夏、そんなに気に病むな」

今の僕は千冬姉さんの気遣いすらダメージになってしまって
あんな不様な負け方を晒してしまったなんて

「……」

こんな調子じゃあの草食動物にまでしまつたな……

「いちか？」

「… 篠代、いつたの？」

「いいいい、一夏！？おまつ、何をしてるんだ！？」

「何」

「わく／＼わく／＼」

「膝…？あー」

セツヒヤエハシノヒトヒト保健室で僕千冬姉さんに膝枕されてたんだった。

「……篠ノ之、鍵を閉めろ」

「はっ、はい」

別に危険物を扱う訳ではないのに筈は危険物取扱者顔負けの慎重且つ纖細な動きで鍵を閉める

僕は起き上がり携帯端末を取り出す

その時千冬姉さんが残念そうな表情をしたのは見なかつたことにしておこつ

「気分転換を兼ねてあの追加武装の設定でもしようかな？」

「追加武装…？」

「また出鱈田なアレを……」

纂は興味深そうに、千冬姉さんはため息を吐きつつ『またか』みた
いな表情をしていた

「そ……今の段階で可能なのはブルーティアーズの強化機体
でもまだ実戦に投入できるかと聞かれたら無理だけどね」

それにあの草食動物が性能に追いつかないと意味がないしね

「ところで一夏、そのベルフューゴールとやらはなんだ？」

あれ？ 簄つてこんなに田^だが良かつたつけ？
結構字が小さいのに……いや、それより上手く誤魔化さないと
正直コレを知つたら使う前に死んでしまう

「紫雲の追加装備のコードネーム……主に剣主体の接近特化型だよ」

「ほお……」

「…………あー」

今まで忘れてたけど僕の部屋（仮）に貼られている僕の写真どうじょう

「ところで織斑、あの[写真はどうするのだ?」

丁度今考えてましたよ、でもどうしようかな……?

『ハハハ』で足りるかな

「一夏、あの[写真とはなんだ?」

「僕につきまとう変態ストーカーが僕を盗撮した[写真]

「ついでに言つと弱冠14才でここを卒業した『残念な天才』だ」

「……大変そうだな、私も手伝つか?」

「それは有り難いね、でも授業にでないと……ついでに他の労働力の確保も兼ねて」

やつぱり業者さん呼ぼうかな?

「……すまない一夏帰つていいか?」

「ダメ」

「これは……相当だね」

「ねーねーおりむー『写真幾つか貰つてもいいかな?』」

みんな僕の予想通りの反応を示してくれたね
帰りたくなる、ドン引き、写真をお持ち帰り

まあ気持ちはわかる、一度教職員+僕で1日かけてやってみたけど
4分の1ぐらいしか片づかなかつたし

「持つて行きたい人は持つて行つていいからね」

渋っていた女子がいきなりやる気になり写真を我先にと取り合いで
始める

「おお～これはすごい」

「のほほんさんは良いの?他の2人は言つたけど

女子たちにやる氣の火を付けた本人は見ているだけで写真を取らつ
としない

「今行つたら疲れるし、互いに潰し合いをしてるときに取つた方が
楽だからね～」

この子は見かけによらずなかなか知将のようだね見かけによらず、
大事な事だから一回言つたよ

「一夏、気になつていたのだがのほほんさんとはどう言つた関係だ
…？随分と中良さそうだが？」

「初日は千冬姉さんの所で泊まつてね、夜中トイレに行つた時偶然
会つて、名前が言いづらいからのほほんさんで僕のことはおりむー
なわけ」

半分ねぼけてたんだけど……それは言わない方がいいね
それよりもこの機体の『クセ』を覚えないとね……柄じゃないけど
秘密特訓をしてみようかな

暗い部屋で一人の少女が虚ろな瞳でパソコンのモニターを見て指を

舐めていた

「ああ……一夏、私の一夏……凛々しくて優しくて強い私のお兄ちゃん」

モニターに映っていたのは笑顔を浮かべている一夏、泣きそうな表情をした一夏

狂気な笑みを浮かべる一夏

怒っている一夏、様々な表情をしている一夏の写真がモニターに表示されていた

「ケホツ……『クー』IIS学園に転入手続きを私とあの子の分をお願いね」

《了解しました。お嬢様》

少女がフラフラ歩きながらドアに向かう

「行きましょう『ファンタムランサー』一夏を殺そつとする愚かな組織を駆逐するため」

少女が部屋から出ると明かりが灯る

部屋には巨大なコンピューターがモニターにはIISの設計図が表示

されそのモニターの前にはひし形の結晶が浮かび、部屋中には一夏の下着やシャツ、使用したストロー や箸が散乱していた。

彼女は一夏が認めた天才の一人で残念な天才と言われ弱冠14才でIS学園を卒業した少女『平泉 緋也』だった。

クラス代表決定戦その2（後書き）

大地震の被災者の皆さん

大変な状況ですが私個人では無力で何もできませんが少しの募金と
家族との再開と無事に物資が届くことを祈らさせていただきます

クラス代表決定戦その3

あれから数日経ちとうとう迎えた決戦当日

『全システムオールグリーン、ヌーヴォラシステム使用可能、LE
S使用可能

スラスター全機稼働可能
エネルギー50%に設定

武装使用可能

トンファー

自立機動兵器『球針』

腕部拘束用兵器『ロール』』

「……オールクリア、織斑一夏『紫雲』行きます」

ピットのカタパルトから射出され、アリーナ・ステージへ一直線に飛んだ

「あら、逃げずに来ましたのね」

毎回思う「ナビ」の草食動物の偉そうな態度ひとつにかならないの?

本当に殺しかねないんだけど

「君を咬み殺すと言つた以上……咬み殺すまでさ」

《第一 戦闘形態》

灰色の装甲が紫色に変わり、腰に装着されているトソファードを手に取り構える

草食動物のI.S.『ブルー・ティアーズ』はその名の通り青色の機体、外見は特徴的なフイン・アーマーを四枚背に従え、どこかの王国騎士団のような気高さを感じさせる……まあ咬み殺すだけだけじね

「最後のチャンスをあげますわ」

「……何?」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなれば、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくってよ」

よほど僕に勝てる自信があるようだね

前回のVONGOLA戦で僕は不様な負け方をした後徹底的に身体

に機体の『クセ』を叩きつけ、全ての攻撃手段をこの身で受け止め特性を知った今の僕に……ね

「今頃英國で首相はもがき苦しんでいるんだろうね
まあ光栄に思いなよ、『紫雲』の最初の対ISの初陣の相手に出来ることをね」

「うーーそうですか……ならお別れですわねー」

『警告！敵ISから射撃体制に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。』

ISの警告から数秒後に『スタートライトmk?』から青いレーザーが僕に放たれる

「関係ないよ」

『Nuvo1a System Timeline 0:05』

ヌーヴォラシステムを発動し、トンファーでレーザーを吸収する

『エネルギー25%吸収変換率100%』

これで僕のシールドエネルギーは50から75になった。

変換率100%の限り相手のエネルギーを吸収し続けて変換する

「そんな！？」

『Time Over』

「ヌーヴォラシステムタイム10」

『Nuvol a System TimeLimit 0:10』

スラスターにエネルギーを送り、圧縮させた後爆発せるように解放して加速させる

この技は『イグニッシュン・ブースト瞬時加速』の原理の安全さと危険さを限界まで上げて安定させる

この『紫雲』の特性はボンゴレーの『イグニッシュン沢田綱吉』の技を応用されている部分が多い

全てわかる訳ではないけどこの『瞬時加速』を応用して考えた『イグニッシュン・ムーヴ瞬時移動』は大空の炎とXバーナーがもとになつたと思う結構話しがそれたね、この『瞬時移動』は解放したエネルギーをヌーヴォラシステムで吸収したら無限に使える

「遅いよ」

「早いつーさや ああああーー！」

『エネルギー103%吸収変換率100%
Time Over』

10秒の内移動に3秒、攻撃に2秒、吸収に5秒
僕も自分で疑うのもおかしいけど人間技？と疑う…けどこれは『ク
セ』を叩きつけたおかげで使えるようになった。

草食動物は僕のトンファーの一撃で地面に衝突している

「これで一つ目の実験終了、ほら…早く攻撃してきなよ」

「あなたに言わねなくても…！」

青いレーザーが何発も僕に向かい放たれる
勿論すべて吸収してシールドエネルギーに変換する

「じゃあ……僕の番だよ」

『瞬時移動』を使いブルー・ティアーズをトンファーで攻撃し続ける

「あ……君の本気をだしなよ」

『エネルギー300%吸収変換率100%』

「くつ……あなたに言われなくともだしますわよ……」

彼女の周りに浮かぶ四つの自立機動兵器、フイン状のパーティに直接特殊（BT）レーザーの銃口が開いている。
ワオ……面白いね楽しめさせてもらひつよ

「……いいね」

僕はわざと彼女から離れて自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』の攻撃を避ける

「僕にも似たような兵器を持つていてね……行け『球針』」

腰に装着されていた通常サイズの自立機動兵器『球針ボディ』に四つの砲口が搭載されている

『球針』を彼女に向け、僕は『ブルー・ティアーズ』を破壊する

「はあ……すごいですねえ、織斑くんも…そのISも」

ピットでリアルタイムモニターを見ていた山田真耶がため息混じりにつぶやく。

確かに一夏はISはISに関しては初心者で最初は授業についていくのもやっとで知識は無いに等しい
だが一夏は感覚で覚えて闘っている
しかし千冬は対照的に悲しげな顔をする

「あの馬鹿者…また背負つつもりか」

「え？ 背負つ…？」

「あの馬鹿は守ると決めた相手にはかなり優しい
だが放ついたら壊れてしまいそうな奴には厳しく接して挑発して
馬鹿にして圧倒的に倒す
そして結果がどうでも守る

少なくともこの学園の生徒全員や教師全員を守りたいとする

「たすが」姉弟ですねー。そんな」とまでわかるなんて

千冬は照れた表情をして視線をそらす

「姉だからな…見ていると不安になる
その傷だらけの身体にまた傷をつけるつもりなのか」

「あー、照れてるんですかー？照れてるんですねー？」

卷之三

ぎりりりり… いい感じにヘッドロックが炸裂した。

「いたたたたたたつ！！」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「せ、せーー！ わかりました！ わかりましたから、離しーーあつ
わくわくー。」

さやあさやあとと騒ぐ副担任の真耶を気にもかけず、篇は不安そうに

モニターを見つめている

「一夏……」

初めて会った時は無愛想な少年
しかし自分が誘拐されたとき、たつた一人で大人達を半殺しにして
返り血を拭いながら不器用そうに笑いながら手をひいて歩いてくれ
た。
筈にとつて初恋の相手で夢見る乙女風に言つと『白馬に乗つた王子
様』で、筈は『血染めの騎士』と間違つた認証をしたまま生きてい
た。

(無理をしないでくれ)

筈は僅かに唇を噛んだ瞬間、試合は大きく動いた。

「どうだい…？僕の『球針』は

「ハア…ハア……どうしてあなたの自立機動兵器は「脳波さ」脳波
？」

「そうだよ、君のブルー・ティアーズのようて単に指示をだすだけじゃなくて、脳波で常に指示をだしている攻撃、防御、動作にその他諸々……ね」

「そんな兵器あるんだよ」ツーッ

「悔しいかい？見下していた男にいつもやられると思わなかつただううね」

僕はトンファーを構え直し彼女を見据える

「セシリア・オルコット、君はいざれ壊れる可能性がある、だから今君を咬み殺す、誰にも壊されないよう」

『Nuvola System Timeline』

装甲の色が変化しセシリアの背後に周りトンファーで殴り飛ばす

「早く終わらせよつ

腕部拘束用兵器『ロール』をセシリアの腕に向けて放つ

カシャン、と手錠のなる音がなつたと同時に体中を拘束する

「なつー？」れな

「腕部拘束用兵器」^{ワードル}

本来は腕を拘束する兵器だけど裏技で全身を拘束することができる
ようになつてね

まあ今の君を守るには丁度いいよ

残りエネルギーは確実に50を下回る

「おやすみ…セシリア・オルゴット、今度は君を守るよ」

僕は『ロール』を引き寄せてセシリ亞を『ロール』ごと殴り飛ばした

〔試合終了。勝者——織斑一夏〕

決着を告げるブザーが鳴り響いた瞬間、僕の目と鼻の先には黒いビームが迫っていた。

ドオオオオオオオン

黒い戦慄（フラッシュガード）（前書き）

来てくれる人、読んでくれる人、感想を書いてくれる人ありがとうございます

今回も短くてすいません

次回はセシリアメイン、もしくはほぼ原作通りで行きます

ところで。さて何で読んだら良いんですか？普通にオーアールゼットで良いんですか？

黒い戦慄（フラックシヴァー）

僕が一瞬油断をしたときを狙うなんてね
一応反応を確認してたけど……

「君……僕と殺し合いをしたいの？」

黒いシャープなフォルム、それに両肩のキャノンは紫雲に搭載され
るはずの『ブレイヴ・nA』
ライフルは……知らないタイプ
背中の自立機動兵器は『球針』と同じタイプ
まさか僕と同タイプの機体……？

「凄いねエ……おにイちゃん」

この喋り方にお兄ちゃん……1人心当たりがある

「君は平泉 緋也かい？」

「アハハハハツ！違つよオ……！」

声からして少女のHSのキャノンの砲口が僕に向く

「……何故撃たないの？」

中国の『甲龍』と同じタイプかな？
仕方ない、僕も一度だけ使える試作銃を使おうか

「アハ」

「ツー？」

突然全身に電撃が巡るような痛みに襲われる
体が…動かない、それどころかISがおかしくなった。

「ビオ？ エネルギー・ジャックの味は」

「エネルギー……ジャック？」

「そ、ウイルスをISに送り制御を狂わせ人体を硬直させる
そして数秒後ISを乗っ取るシステム」

なるほど……それは良いことを聞いた。

それなら対抗策がある、ただ後で千冬姉さんに怒られるだろつた

「LES発動」

『Life Energy System』LES』起動開始』

「ツ…！アアア、ア、ア、ア、ア、ア…！」

これは……痛いね、これならエネルギー・ジャックの方がまだましな
痛みだ。

それに…早く終わらせないと僕が死ぬ

『MK-L3 R?』ブリューナク』展開』

「凄い…凄いよ…おにイちゃんあああん…！」

僕は大型のライフルMK-L3 R?『ブリューナク』を構える

「ターゲット敵ISに設定、フルキラー・モードOFF、弾数1、サ
ーチモードON」

『ブリュー・ナク』に転送される
僕の頭に直接情報が入り、アリーナの環境のデーターが僕を通して

『敵I-Sの移動パターンはコロタイプ
距離は500～1200を移動中
湿度による弾の軌道修正なし
風向きによる弾の軌道修正なし』

「特殊スコープ展開」

《スコープ展開》

僕のIIS『紫雲』のブラックボックスにあつたデーターに特殊モードが幾つかあつた

一つはモード一とモード二時にのみ使用可能武器

copeとsniperフォーム
もしかしてと思ってもつと調べたら一つだけ射撃武器があった
それがブリューナク

マシンガンにショットガンにミサイルランチャー、レーザー兵器を1つで貰える特殊な射撃武器

『敵IS接近型の武器展開を確認』

「狙い撃つ！！」

『Shot』

ブリューナクから放たれた1発の弾丸が黒いISを撃ち抜く

「ヌーヴォラシステム発動！！」

『Nuvol a System Timelimit 1:00』

そしてブラックボックスにあつた特殊システムの1つ
トンファー以外の武装にヌーヴォラシステムを使用できる拡張シス
テム『リホーム』
まだまだあるけど……今はそれだけでいい

「咬み殺す」

「くッ……！」

トンファーにエネルギーを纏わせ敵ISに数発殴りつける

「さすがおにいちゃん……でもまだ…！」

『敵IS沈黙』

「……へ？」

「残念でした…君の機体は戦闘不能
つまり君の負け」

「あの小さいのがあの残念な天才の妹？」

「うん、今さつき緋也に電話して聞いた。
『紫雲の派生機体の『黒い戦慄』のテストをしたかったらしいよ』

姉妹揃ってなかなか危険な子だ。これじゃあ千冬姉さんが悪酔いしてしまうね

姉妹揃つてこの学園に来るなんて……緋也は来なくてこよね、もう卒業したんだし

「ア 紫雲……つまつ前から紫雲はあつたのか？」

「うふ、武装は適当に各國家から『戴いて』ね」

「お前の『戴いて』は『盗む』だろ」

たすが千冬姉なんだ。僕のことを『盗む』存知で

「それとこつまでその性格でこらつもつだ？」

……これまで知られてるとは

「お……れは、しつ……師匠の……せこ……かくがうつって、ああじゃない」と

「なるほど……つまり演技か」

ひゃ……つまりないな、演技でもなこなごうひんじゆうひんじゆう

「俺は幼い頃純粋だからね、だからうつたんじゃないの？」

師匠に頼んで教えてもらつてね……2つの性格の上手な分け方を「

まあ師匠の性格ってひねくれて孤高の狼気取りの厨二病みたいだけ
どこいつ嫌われ役とかに思いのほか役にたつから有り難いよ

「まあいい、さっきから気になっていたのだが……何故白い薔薇が赤
い薔薇になつているのだ？ 確か私にセシリア・オルコットの見舞い
として白い薔薇を注文させたはずだろ
なのに」「

「花屋が車にひかれて血で真つ赤に」「そんなものを見舞いの品にす
るな馬鹿者」最後まで聞いてよ」

「なんだ……？」

「僕は天才的な馬鹿だ」

……すいません師匠、僕はアナタの真似をしてボケたらすぐりまし
た。

実の姉からこんな哀れんだ視線を向けられたのは初めてです

「……」「ホン！…とつあえず織斑　一夏、見舞いに行つた後、平泉
緋和の世話をすむこと」を命ぜる」

「…………うーす」

「は」と返事をしる馬鹿者

「僕はてんと「それはもついいか？」「はー」

部屋からでて思つけど久々に師匠の性格以外を千冬姉さんに見せた
気がする

でもあの性格じゃないと僕は潰れてしまひ
なうことを利用させてもらひつよ、雲雀 恭也…僕の師匠

「僕が大事な人を傷つけた奴をグチャグチャに咬み殺す為に……ね」

先にセシリアに謝らないと……あそこまで馬鹿にした挙げ句氣絶ま
でさせたけど……許してもらえるかな？

嗚呼…やっぱり俺には無理だな『残忍で冷酷』ぶるのは
何時までも甘ちやんな俺は俺らしく咬み殺すまでだ

「…・イショール、君は絶対僕の手で咬み殺す！」

僕と瓜一つの忌まわしいあの男……僕からすべてを奪つた『織斑

一夏』を絶対に許さない

黒い戦慄（フラッシュガード）（後書き）

はい、今回の話で読んだ人の大半は『は？』だと思います
『いきなり追加設定してんじゃねえよ』とか『テメエまたか』とか
思われてもそれは当然としか言いようがありません

まず原作を読んで悩んだのが今の所第一携帯の一夏と互角に鬪える
のが更織楯無しかいなことが判明

実は設定ノート（と言ひ名の落書き帳）には第3段階までありしま
つた！と思つたときは時すでに遅し『設定』を投稿しており、細か
いことは後に更新しておきます

今回の事を軽く説明すると

一夏は平行世界の一夏の記憶をもつていて、平行世界の一夏は別の
一夏に殺されている

殺された一夏は原作の一夏と違い世界を渡ることができる厨一設定
一夏の幼い頃は純粹つてのは殺された一夏が悪意を取り払い本当に
純粹でイメージはでい・えつち・えいの主人公を見てもうればす
ぐにわかります

千冬がブラコンなのはそれが理由です

時間軸で書ひと

一夏と鈴の初対面時はすでに雲雀と会つていて危険時に力を解放する…と力を貸したら性格が若干雲雀よくなつて誘拐後に純粋無垢な一夏に戻る

その後鈴と会つたときも純粋無垢、だけど中学に入ると同時に雲雀のもとで修行して今の一夏が完成
一応ラウラとは会つてます

長くなつてしませんが最後に読者の意見がほしいので聞いてください

実は話しが進むつれに一夏が所属する組織が出てきます
それでできれば他のラノベとコラボをしたいのです

作品は2つで

作品のヒントその1は 一方通行役 猫 D

その2は 雲雀役 生徒会 F

戦いモノではなくわりと平和な作品です

アリかなシカで聞きたいと思います

感想に書いてもらえば嬉しいですが書く価値があるとは思えない
のでメッセージでよろしければお願ひします

次回から長く書きたいと思います

過去編その1『鐵斑千冬の驚愕』（前書き）

あー、お久しぶりですアニメ版もすもすにイラッ ときたフィムです
福島県から来た従妹にラノベを貸しているので本編が書けなくなり、
質も普段の倍ダウンします
なので当分過去編や番外編をやります
今回は一夏が何をしても驚かない理由が少しあります
ショタ一夏は当分続きます

過去編その1『織斑千冬の驚愕』

私、織斑千冬はおかしくなってしまったのだろうか
最近私の弟、織斑一夏が可愛くて可愛くて仕方がない、一応友人で
ある束にも話してみたが危険な女だと言つことはわかつた。よく見
ればアイツが一夏を見るときの目が野生の獣が獲物を捉えた目だつ
たからだ

「はあ……」

「どーしたの？ちいねえ」

ああああ…可愛い…止めて、可愛らしく首を傾げるなああ…！…！

「な、何でもない…それより一夏、学校はどうだ？」

「たのしーよ」

私は一夏の純粋無垢な笑みを見ると安心する、一夏はたまに静かに
なり口を開かなくなるときがある、それと急に大人びることだ。ま
だ幼いのに急に血なまぐさいことを知った大人みたいになる
だから純粋無垢な一夏を見ると、まだまだ幼い…とわかる

「ぶーん…ぐしゃあ

“ひつやーりー 夏は絵を書いてこねりしき、ぶーんと書くのは飛行機やロボットが飛んでいる音だねー、だが… ぐしゃあとは一体？

「じゃあたー」

「ほー…見せてくれ

「ここよー」

はー…と可愛らしく紙を渡す一夏を見て頬が緩みそうになるが、なんとか緩まずに、絵を見た

「なつ…ー?」

「?」

まだ幼いから絵がわかりづらい部分もあるけどわかる、何故なら私はこれに似た物を見せてもらっていた。
束がまだ造るのは無理だなーとか言って私に見せた一夏とやらの『白騎士』にそっくりだった。

もちろん一夏に見せてないし束も誰にも見せていない

「黒い……？」

「それは黒騎士、本来僕が使つ予定だつたEVAだよ、千冬姉」

私はいつもと違つ喋り方になつた一夏を見る。見た田は普通の一夏だが……いや、田がおかしい

「千冬姉の思つてゐる通りで合つてるよ……といつあえず初めましてかな?この時代の千冬姉」

「この時代……何をバカなッ!？」

おかしいと思つたその田はあまりにもおかしかつた。つぶらな瞳の色が逆になつてゐる、周りが黒で中が白色になつていた

「あまり時間がないから手短に話すと俺はパラレルワールドの織斑一夏……と言つてもすでに死んでいるけど僕はみんなを死なせてしまい黒騎士を使えなくなり殺されたんだ……もう一つのパラレルワールドの俺こ

「待て、意味がわからん

「待たないよ、今のところ黒騎士と零式に耐えられる織斑 一夏は俺が確認した4兆2739億1503万4651個のパラレルワールドの中でのこの時代の織斑 一夏だけ、千冬姉には悪いけど俺の能力でこの時代の俺を鍛えさせてもらひ」

「4兆2739億1503万4651個のパラレルワールド……かなりの数なのに選ばれたのがこの時代の一夏……？」

「黒騎士に求められる純粹な闘志と零式に求められる純粹な優しさを兼ね備えるのはこの時代の俺だけ、この時代の俺は絶対に最強にしないといけない」

「少し待て……せめて黒騎士と零式に教えてくれ」

「黒騎士は千冬姉の知る白騎士の後継機、零式は……詳しく述べは言えないけど千冬姉の新たな機体になる予定だった機体」

「何故詳しく言えないんだ？」

「俺が未来をあまり言つとこの時代が滅びかねない、俺は俺でやらないといけないことがあるから……ああ、もう行かないと」

わからないことだらけだが……私の弟は大変なのはわかつた。私は何もできないのか……？いや、一つだけできる」とある

「一夏…正直わからなことだらけだが無茶だけはするなよ、いつでも来い」

激励しかできない…無力な姉をゆるしてくれ一夏

「そんなことないよ千冬姉、ありがとうございます」

「ああ…行つてこい、愚弟」

今の私は泣いてるのだろうか…どうして素直になれない……どうして行くなと言えないのだ…織斑 千冬…

「ちいねえ？泣いてるの？」

いつの間にかパラレルワールドから来た一夏は今の一夏から消えて、一夏はもとに戻っていた

「誰か泣くか…弟が頑張っているのに泣いてられるか」

「へんなちいねえ…おとーとはボクだけなのに」

弟は僕だけなのに…か、今の私は4兆2739億1503万465
1人と弟の命の鍵を握っている気分なんだがな

「一夏、その絵を束に見せていいか?」

「たばねえに！？いいよ！…！」

「いい子で待つていろよ」

「うん…」

私は一夏の頭を撫で、一夏の絵を持つて束のもとに向かう、アイツ
なら興味を持つはずだ
もしかしたら何かの役にたつかもしれない

「ちこねえのあとーとはボクだけ……か、ちこねえのことだからまた無茶をするだらうからボクが頑張らないと」

『ナウだな……』

ここにはボクがまもる、まつもせかいつあもつともしゃるもひりひ
も…ザーいんまもん…

過去編その1『鐵斑千冬の驚愕』（後書き）

すウウウウウウウーイイイイイイイアアアアアアアセHHHHHNNNN
ンン、一方通行風に

はい短い・駄文・つまらないのMDTです

お願いですから辛口だけはやめてください……もう俺のSPは
よー！……ああSPってのはストレスポイントであつて、スペシャ
ルポイントじゃないですよ？

従兄妹達とともに会話が出来たと思えば身内からの八つ当たりで
この間 キレちゃつた

さてさて次回は…未定です

本当スマセソでした…！次回もよろしければみてください…！

「」の小説の一夏の関係と行動その一（前書き）

もつ少しで小説が帰っていくので本編再開できません

IJの小説の一夏の関係と行動その1

篠ノ之 篓

一夏のファースト幼なじみにして一夏に変な二つ名をつけた本人原作ほど束を嫌つていらないが一夏に対する行動を見て引いてる唯一、一夏の弱点を知つてゐる女性、一夏を異性と見て好意をよせてゐるが兄として見つていることが多い、因みに転校した篓をイジメた人間は一夏に半殺しにあつてゐる

好感度 5 (1~5)

セシリ亞 オルコット

一夏専用の完成したISで最初にボコボコにされた女性、実は別の機体でボコボコにしていたがセシリ亞のプライドの為一夏が初めてと言つた

セシリ亞は忘れてゐるが一夏とは幼い頃に会つてゐる、因みにセシリ亞に残された遺産を狙つた大人達は後に一夏に半殺しにあつた後経営を行つてゐる者達に圧力をかけて潰してゐる

好感度 5

鳳 鈴音

一夏のセカンド幼なじみ、純粹一夏から雲雀一夏に変わつた所を見た悲惨なヒロイン、しかし一番一夏の世話になつてゐる、和食を一夏から教えてもらう

ある意味優遇されているが一夏からは猫扱いされることがある、一

夏のある部分がトラウマになっている

因みに鈴の転校の後押ししたのが一夏であり軍の上層部を所持するIS3機と一夏専属の特殊部隊と一夏本人が45マグナムを向けて脅迫した。

好感度 5

シャルロット デュノア

一夏と一番面識ないが何回か会ったことがある

一夏はシャルロットがいないときにデュノア社の社長にある理由でキレて大怪我をさせが取り押さえようとしたSP、警察を半殺し、フランスの軍やISを半壊滅状態にして経済的に崩壊しかけ被害額は億を軽く超えた。

因みに社長は全治1年の怪我を負つたが一夏は知り合いの医者に治し1週間で強制的に働けるようにさせた。

フランスは一夏の逆鱗に一度触れている為もつ一度逆鱗に触れたら文字通りの崩壊する

勿論一夏はシャルロットが女なのを知っている

好感度 不明

ラウラ ボーデヴィッヒ

最初に一夏にボロ負けしたのがラウラで一夏対黒兎隊との模擬戦で一夏はバイク1台とペイント弾のマグナム45を1丁で圧倒した。ラウラはそれ以来対抗心を抱き勝負を仕掛けるが全敗、ラウラを『兵士』としか見てない軍内部を徹底的に潰しドイツは軍隊の7割を一夏に向けるが完成度60%のISにより僅か1分で殲滅させられる

一夏は姉がドイツに行つたときに飛行機に潜り込みドイツ軍に潜り込んだついでに軍のデータベースをハックしリアルタイムで情報が入りそのことをドイツ軍はわからない、VTシステムを作った研究所は原作と違い研究員は全員重傷、施設は全壊ラウラは対抗心を抱いているが一夏に好意を持つており一夏がドイツにいるときは一緒に寝ていた。黒兎隊も一夏のこと慕っている因みに唯一国の中で一夏に本気で攻められた国

好感度 5

最後に

この小説の一夏は原作の一夏を遥かに超え雲雀以上に過激でかなり危険人物、しかし怒らせれば国を崩壊させることなど簡単な為、国は一夏に手をだせない、しかし一夏は何も余計なことをしなければ何もない

未完成のIIS設定

名前 黒天

武装 ?

特殊武装 ?

製作者 篠ノ乃 束

概要

名前と制作者以外が公表されていないE-Sで各国がわかつているのが消える上レーダーに映らなくセンサーすら反応しない為一瞬で敵を殲滅させることが可能：

その姿を見た人間は口を揃えて『悪魔』と答える

「」の小説の一夏の関係と行動その一（後書き）

スイマセン

待たせたうえこれでスイマセン

番外編その1『一夏の起動実験』（前書き）

お久しぶりです、今回の話しさは自分でもよくわかりません
時系列はセシリア戦以降鈴登場前です

ユニーク10000人突破＆ユニーク80000突破、皆さんありがとうございます！！

番外編その1『一夏の起動実験』

「普通の授業がヒマだからな… そุดな織斑、折角だお前の始めてIJSを起動した時の話しをしたらどうだ?」

……おかしい、僕の姉はブラコンなあたりからおかしいが… 今日は群を抜いておかしい、あの鬼教師の千冬姉さんがつまらないとか言うのは絶対おかしい例えるなら大人しい束姉さんか満面の笑顔で商店街を全力疾走する僕ぐらいおかしい、いや… 実際にやってないけどさ、ほら姉さん… 固まってるよ、山田副担任なんかショックで石化にちかいことになってるし

「はいはーい…! その時の話しなりこの天才の束ちゃんにお任せだよー」

ズンガラガツシャーン、そんなコメティアンな音をたてながら僕は椅子から転げ落ちた。

おかしい、本当におかしい… 冷静&クールに定評がある僕の定評がこのままでは剥がれかねない

「……一応聞いておくが… 束、

何故ここにいる

僕は制服の埃を払い、椅子を直して座つて咳払いをする

「そこ」の姉さんが言つよつに何故世界中が探している束姉さんもとい束博士がここにいるの?」

「えー? 何か最近いーくん構つてくれないもん、紫雲につけておいた盗聴器で都合よく登場したくなつたからー」

アナタはそんな事の為に紫雲の容量を……アンリマコのことだから束姉さんに渡してあるから不可能ではないけど、何何かの武器かと思つた武装の容量の3割をしめていたのがまさか盗聴器だつたなんて

「もしかして束つて…あの篠ノ乃 束ですか!?」

生徒が一人騒げばみんなが騒ぐ、どれくらい経つただろうか、千冬姉さんがキレうそので机を殴り、恐怖で黙らせた。

「で? 天才の束ちゃんにお任せとか言つていたが、何を話すつもりだ?」

「えーとね、いーくんの最初の専用機になる予定だった『天牙』『ブルー・クラウド』『龍王』の3機がいーくんの技術に追いつけて壊れちゃうやつと『黒天』と水中用『サダールスト』に高速戦闘用『ライトニング・スター』…後はベル「それは駄目だ!」い

「くん？」

クラスがひんやりと静まる、僕が叫んだのと束姉さんを睨んでるからだろう、でも『ベルフェゴール』は駄目だ。まだアレは早すぎる、あんな光景…見せられるモノか

「それに束姉さん、あれは……『うなんて呼ぶほど生易しくない、アレはただの人殺しの兵器だ』

(束…一夏に何があつた?)

(……それはちーちゃんでも教えられないよ)

あの光景は今でも覚えている、I S専用の剣で人を斬つた感触、あの『砲撃』で人を数百と葬つた光、あの武装で人を握り潰した感覚、どれも鮮明に覚えている

今とは違う最初のベルフェゴールは……

「一夏…」

「ほ、笄」

僕は笄に肩を叩かれ、気がついた。周りの生徒が怖がつていいことに

「んー、じゃあ見よっか」

机にモニターが現れ映像が流れる

「因みにいろいろな視点で見れるからね』

『天牙、初期設定終了、戦闘に移る』

『じゃーあ、あの戦闘機落としてね』

天牙を装備した一夏はレーダーに映った反応に近づいて、腰にある
プラズマソードを右手に持ち、斬りつけ、左手にマシンガンを持ち
戦闘機を撃ち抜く、攻撃から逃れた戦闘機は一夏に向けて機関銃を
撃ち、一夏は両手にプラズマソードを構えて弾を弾き続ける

『…………ん？ 束姉さん、左手の反応がおかしいよ』

『えー？ ちょっと待つて……あ、本当だ。』

するとパキンとこう音がなると左手がだらんと垂れて動かなくなつた。

『つとーーー』

呆気にとられた一夏に向けて残された戦闘機が一夏を襲う

『落ちる』

一夏の右手に光の粒が集まり追加武装のイタリア製のショットガン『アルセラ改』を構えて数機の戦闘機を一撃で撃ち抜いた。

『おー！流石じーくん、あの状況でみんな動きできるんだ』

『まあ… 束姉さんの期待に応えないとね、それより他の機体もするんでしょ？ 今度はちゃんとしたのをしてよね』

『りょーかいりょーかい、この束ちゃんにお任せーーー（今の… ほぼ第四世代の機体だつたんだけどね）』

そしてブルー・クラウドはBTタイプの第四世代型だが自立機動兵器が一夏の指示が自立機動兵器に耐えられず自爆、甲龍の第四世代型である龍王も一夏の空戦に耐えられず中破した。

（月×日 プロト第五世代型IS起動実験）

黒天は国家秘密に関わるので映像データを破棄しました。

『今度は水中用か…』

『ジリジリ…ソレの乗り心地は

一夏は全身^{フルスキン}装甲型のIS、水中用IS『サダルスード』を纏い水中には青色の光を放つコンテナがあった。

『なかなかいい感じだよ、少し不安要素があるけどね』

手を握つたり開いたりして感触を確かめて水中に入る

『相手のコンテナも攻撃してくるからつまごとして破壊してねー』

『簡単に言つてくれるね』

フルフェイスのモニターに脚部の部分が点滅する

『わうっ!!』とか…』

脚部の装甲が少し展開しミサイルが放たれ、コンテナを二つ破壊する

『次』

肩に付いていたパックが展開し、魚雷が放たれ、歪な動きをしながら的確にコンテナを破壊する

『お見事……じゃーあ、最後にこのポイントの基地を破壊してねー』

『

『ねえ、それ……ああ、通信切られた。仕方ない…エネルギーの残量と武装のリストを展開して』

『エネルギー残量600%展開可能武装は『肩部搭載魚雷残弾数8
『スーパークリーピング魚雷残弾数10』『腕部アンカー×2』『
背部大型キャノン砲【アルテミス】残弾数20』『背部搭載マイク

ロミサイル残弾数500』『脚部搭載ミサイル残弾数10』
特殊武装として『肩部搭載ジャミングミサイル残弾数20』『特殊
ステルス迷彩、使用可能時間1分』』

フルフェイスのバイザーが赤色に光り指定されたポイントに向かう

指定されたポイントにあつた海沿いの施設は違法研究施設で国家的に介入できない施設だった。

『目標ポイント到達、敵勢力：排除開始』

『アルテミス展開』

サダルスードの背中に巨大なキャノン砲が展開され、リロードし薬莢が排出され、バイザーにレーダーが映る

『発射』

『Shot』

ドオンと音を鳴らしアルテミスから放たれた弾が研究施設を襲う

『よし、アンカー射出、特殊ステルス迷彩も使用、ミサイルを全弾とジャミングミサイルをありつだけ放つ』

『了解』

特殊ステルス迷彩で視認不可能となつたアンカーが地面に刺さり、キヤノン砲でパニックになつた。施設にミサイルが降り注ぎ、ジャミングにより衛星でさえデーターが得られなくなり、通信が出来なくなつた。

海から地上に上がつた一夏は施設にマイクロミサイルを放ち続ける

『ドイツ空軍との反応を確認、10時の方向』

『ふうん…なら迷彩を使って引くよ、ジャミングで当分これ以外のレーダー使い物にならないだろうし』

月 日～高速戦闘用型 ライトニング・スターの起動実験

「ふーん、海の次は空…ね」

『うふーーほら、男の子って空を飛びたがるものだし』

「でもこれ高速ぐらいの速さになるでしょう？」

『うん』

「ちういい、ライティング・スター」

『A11_Light』

軽装甲ながら固い装甲でシャープなフォルムで両脚に四つのスラスター、腰に二つのスラスター、肩に二つのスラスター、背中に六つのスラスターでメイン武装はナイフとサブマシンガン、追加武装でミサイルポットを装備し、飛び立つ……

「以上」

僕の一言でクラスからブーリングが向けられる、実際黒天は機密事項だしライトニング・スターの初起動時はスピードに耐えられず何

度か意識を失つているし…あれを見たらトロウマになりかねない

「もつと見たい…！」

「ねーねー！」

「一夏さん…。」

……イラッ

「そんなに見たいなら見せてあげるよ…。」

黒天を展開するがクラス全員には見えていない、そりやあアレを使つてるからね

「一夏くん…！見せてないよ…。」

「……展開」

教室の鏡を見ると僕の姿が足からスーと消え、クラスメートは全員驚いていた。

「ほう…」これが一夏の言つてたシステムか

「うん、ドイツ軍を壊滅にまで追い込んだ黒い天の鎧、黒天のミラージュフィールド」

どうやら姉一人は満足したらしく、ならもういいかな…？

「解除」

ミラージュフィールドを解いてE-Sを展開した状態で教壇に立つと
何人が悲鳴をあげる
見た目怖いからね、正直僕も怖い

「わかつた？因みにコレ国家機密事項だから口外したら大変だから
ね」

クラス全員が青ざめる、はは…ザマア見る……だけど、本当に国
家が介入しないと限らないから警戒をしておかないとね

「じゃーねー」

気がつけば東姉さんは窓から飛び降り、二ンジン型のロケットが飛んでいった。

あの人…フリー・ダムだね

過去編の2『BELPHÉGOR』(前書き)

すいません、最近いろいろあったワイヤムです
なかなか本編がすすまないので過去編をやります
いつも来てください皆様ありがとうございます

過去編その2『BELPHEGOR』

「ベルフェゴール……これがあの禁断の機体」

「わうだよー」

僕が格納庫に鎮座しているIS『ベルフェゴール』を見ていると頭に犬耳、服は赤い服だから一人赤ずきんの束姉さんがドアから入ってきた。

「みんな勝手だよねー、こんな機体を世界で造つて誰も使えないからつていーくんに押しつけるなんて」

「そうでもないよ……実は楽しみだったりするから」

僕はベルフェゴールを待機モードにして、すぐに展開してベルフェゴールを纏つた

そう、この時の僕はまさかあんな事になるなんて思わなかつた。

「あれが例の国際テロ組織のアジトってわけなんだね」

『うん、政府からは生かしてもいいし殺してもいいだつてさ』

「ふうん……まあいいや、じゃあ始めるよ」

ベルフェゴールの肩と胸の装甲が開き砲身が展開される
その瞬間、一夏に激痛がはしった

「ぐうひーーな…なん」

『ベルフェゴール戦闘モード
キルモード
アヴァロン出力10%
敵殲滅行動開始』

「は……？」

一夏が啞然とした途端、200M先にあつたテロリストの基地の半分が消し飛んだ…否、蒸発した。ほんの一瞬で数百の命はこの世から消えた

「くつ……操作が……！」

『いーくん！…どう……』

「通信まで……これはヤバい、まさか制御すらできな

『敵の生存を確認、殲滅開始』

スラスターが起動し、基地に突撃する
テロリスト達は突然襲撃されたことに浮き足立つて、パニックに陥
っていた。

「ガ……ガガツ」

『操縦者の意識を掌握、プロテクト解除』

「アハハハハハ！！！イイね最高だ…やつと娑婆にでれたぜ

ベルフェゴールの意識に一夏は体を乗っ取られていた。その隙にテ
ロリスト達は武装し、（ベルフェゴール）一夏（以下B一夏）を囲
つていた。

「ンだア…ハハッそうか、そんなに死にてえならくたばりやがれ」

《グロムリン》

右手に大剣が出現し、テロリスト達を斬り殺す、しかもその斬撃が周りのテロリスト達も斬り殺し、建物が抉れ、腕や脚が切れてもまだ生きてたテロリストを肩に搭載していくクロードで頭を握る

「ククク…どうだい、一方的に圧倒的な強さに蹂躪される気持ちは」

「さへあせーーーひあせーーー」

バイザー越しにB一 夏は残酷で冷たい笑みを浮かベクローに力を加える

! . ! . ! . ! . ! .

メキッと音が鳴ると腕がダラリと垂れ、B一夏はクロ一からテロリストを離し、地面に投げ捨てた。

からが砕けて最早原型を留めていなかつた

「キヤハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

腕から視認するのが難しいワイヤーブレードが射出され周りの物や人を切り刻んでいく

「ハツハア！！」

腰についていた長剣『エクスカリバー』を構える

「死ねや！！」

360。横に回転して剣を振ると地面を抉りながら斬撃が飛ぶ

『3時方向に輸送船を確認、離陸準備をしています、恐らくこの基地にいた残りの人員かと』

「離陸した瞬間狙い撃つてやんぜ」

クロ一を地面に刺し再び両肩と胸の装甲を展開してアヴァロンにエネルギーをチャージする

『エネルギー30%』

「今だ…！」

紫色のレーザーが離陸した輸送船を撃ち抜いた。被弾した所から蒸発し、輸送船も蒸発して乗つっていた全員がこの世から跡形もなく消えた

「ギャハハハハハハ！－！－！－！」

B－夏は笑いながら剣を振り、周りを切り刻むすると上から緑色のレーザーが降り注ぐ

「チツ－！－！」

B－夏はそれを飛んで回避して、レーザーを放つた相手を睨む

「おいおい、今の避けやがったぜ

「しかたないよ、肉体は一夏なんだぜ」

睨んだ方向には緑色のエスを装備し、ライフルを構えた少年と銀色

のHSを装備した少年がいた。

「何で野郎がHSに乗ってやがる

B一夏の質問を無視して緑色のHSの男はライフルをB一夏に向ける

「俺たちに勝つたら…教えてやらない

『ブラスター・カノン』

ライフルから放たれたレーザーをB一夏は避けるがレーザーが屈折してB一夏に直撃した。

「クツ」

「遅いよ」

銀色のHSの男は2丁拳銃をB一夏に向けて

「しまつ」

ズガガガガガと近距離で何発も撃ち、脚のミサイルを放つ

「くそ、クソッ！…」

何発か攻撃をくらった一夏は逃げよがりするがミサイルに阻まれる

「誰だア！…」

B一夏が睨んだ先には橙色のHUGを纏った少年がミサイルポッドを構えていた。

「僕…？僕は空夏 一也、君を止める者だよ」

一也はミサイルポッドをしまい右手にライフル、左手にはマシンガンを持つ

「僕と……ロヴァイヴ・セイレーンが君を…倒す…！」

「やれるもんならやつてみやせ…！」

橙色の閃光と銀色の閃光がぶつかり合つ

「ねえ…ウラヌスのエネルギーがかなり減ってるよ」

「…俺のクロノスもだ」

互いに確認し合いつと通信が入る

『失礼します、クイーンからクロノス及びウラヌスに撤退命令がでています』

緑色のINS…クロノスを装備した少年が舌打ちをしてライフルを降ろす

「しゃーねーか、エネルギーもヤバいしな」

「後は一也に任せましき」

2人は戦線を離脱し、それを確認した一也はB一夏を蹴り、至近距離で腰に搭載していたミサイルポッドからミサイルを放つ

「グゥウ…！」

B一夏は低出力で肩のアヴァロンを一也に向けて撃つが、簡単に避けられマシンガンをうけ、リヴィアイヴ・セイレーンの脚に付いている隠しブレードの追撃をくらつ

「俺の攻撃が当たらねえ！！」

《残りシールドエネルギー50%低下》

「はああ……」

リヴィアイヴ・セイレーンの両腕に搭載していたクローデベルフェゴールの両肩を掴み、アヴァロンの砲台を壊し、ベルフェゴールのクローが抉れる

「一夏の体……返してもいいよ

「ツツツツ……！」

B一夏は逃げようとするが動けず静かにライフルの銃口を向かれる

「フルバースト」

腰のミサイルポッド、右手のライフル、左手のマシンガン、それに両肩に搭載しているガトリング砲、太股部分に搭載している隠し腕にショットガン、ミサイルポッドを展開し胸の装甲が開き小型のガトリング砲を展開し、B一夏に向ける

「ショット」

月 日 とある国際テロ組織の基地殲滅時、IS操縦者がISに乗つ取られ暴走、数百人を虐殺する
秘密裏の組織から2機の擬似ISの戦闘
空夏 一也と名乗る男性IS操縦者は戦闘後オーロラに入り消える
乗つ取られた織斑 一夏の様態は怪我は軽少
ベルフェゴールは当分使用禁止の為コアを抜き取る
尚空夏 一也の使用していたIS『リヴァイヴ・セイレーン』は第4世代並みの戦闘力
形式番号からしてフランスのISであることが判明された。

レポート制作者 織斑 一夏

転校生はサード幼なじみその一（前書き）

かなり投稿が遅れました。
本当にすいません、しかも雑な仕上がりになつてます。
こんな作品をまだ見てくれる方がいるならまだ頑張ります。

転校生はサークル幼なじみその1

「ではこれよりTOSの基本的な飛行操縦をしてもらひ。織斑、オルゴット、平泉妹。試しに飛んでみせら」

四月も下旬、遅咲きの桜の花びらがどこぞの会社のビルつ腹のセクハラ狸部長の頭のように散った頃。僕は何度も鬼教官である千冬姉さんの授業を若干真面目に聞いていた。

「おこーちゃん、『ひこうくじゅう』って何?」

「……飛行時に行つ操縦」

「わかつたー」

あれでわかつたんだ……凄いな

「早くしる。熟練のTOS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ!」

まあ……ちゃんとやらないと千冬姉さんが怒るし、緋和のリハビリもかねてるからそれなりにやらないとね

「集中しろ」

僕は瞳を閉じた。刹那、右手の指輪から全身に薄い膜が広がって鎧を纏う

時間にして0、1秒、瞳を開けると浮遊しているのを確認すると紺和もブラックシヴァーを展開していた。

あの時は違う装備が全部変わっており、背後ブースターには獣の牙を長くしたような形状のビット『ファンギビット』に肩には大型ライフル『ダイダロス』太腿部分にはビームピストル『レイシングH2』右手にはライフルの『クレアK1』左手にはシールドの『ハリウス』の射撃の武装ばかり、まあ紺也のISは接近の装備ばかり、でも僕の機体と相性がいいからフォーメーションはくみやすいそんなことを考えていたらセシリ亞もブルーティアーズも展開していた。

「織斑は流石と言つたところか…平泉妹は少し遅いが文句ないな、それにオルコットも代表候補生と言つたところだな」

「はい!」

「じゃあ飛べ」

僕と紺和は千冬姉さんの指示と同時に瞬時移動で急上昇して人が米粒ぐらいのサイズに見えるぐらいで静止する

「流石だね緋和、僕の瞬時移動をものにするなんて」

「おねーちゃんに教えてもらつたの」

なるほどね…幻影の槍兵なら確かに瞬時移動を使えばHISの絶対防御程度なら簡単に破れる
緋和に見せた時の標的が気になつてしかたがないけど今は訓練中だし集中しないと

『織斑一・ビ』まで飛んでいる

「ひとつ…こつもの癖でね、セシリアがいるポイントまで降下するよ」

『せつとじろ馬鹿者、それとオルゴットの所まで行つたら地上一〇〇三まで急降下しろ、いいな?』

「はーい…」

なんで緋和は機嫌悪い時の姉さんを怖がらないんだろ?へ
やつぱり子どもは不思議だね

「はあ…一夏さんなりとしかくあの子ども元も負けるなんて」

自分の不甲斐なさにため息を吐いて頭上を遙かに超えた所にいる二人を見て再びため息を吐く

自分は一夏と戦つて負けた。弱いと思っていた男に負けた。だけど緋和は一夏を苦戦させて一夏の命懸けの切り札を使わせた。だけど自分はその背中にすら追いつけない、機体の性能、操縦者のテクニックと戦闘経験、すべてにおいて自分は劣っていた。

「おねーちゃん、どうしたの？」

「ひ、緋和さん…? こいつのまじで…」

「今ひとつ、もう少し一夏さんほ離してよ」

セシリ亞は緋和が指を指した方向を見ると心配そうな表情を浮かべながら空を見上げる一夏がいた。

「おねーちゃんが先に行つて」

「へ？わたしがですか…」

「うそ、おにーちゃんが嫌な予感があるから……」

「嫌な…予感？」

「もしもおにーちゃんを狙つなら私とおねーちゃんで迎撃、私が狙われたらおにーちゃんをおねーちゃんが迎撃、おねーちゃんが狙われたなら……私とおにーちゃんで迎撃する、最悪……殺す」

「うう…殺す…へ…ビリトナリで」

「あれはおにーちゃんに聞いて、私はもうおにーちゃんに守つても
りつだけじゃないから、今度は私がおにーちゃんを守る」

「……」

「ビリした織斑」

「いや……何か嫌な予感がしてね」

「何だろ?……殺意じゃない、もつと単純なにか

「お前の感はよく当たる、それにオルコットの様子も気になるな」

「……確かに」

僕が話しかけても反応がなかつたし……多分僕に負けたのがまだ心に残つて……

「無理しないといいんだけど」

僕は再び空を見ると視界が真っ暗になつた。
そして気が付くと地面に叩きつけられていた。

「がつ……」

「一夏ー。」

「織斑君！？」

僕が目を覚ますと、夕方になっていた。しかも片目が見えないときた

「医務室か」

「そうだ。約6時間、お前は眠っていた」

僕が声の主を探して首を向けると額に冷たくて固いモノが当たった

「男の寝顔を見る趣味はどうかとおもつけど、それに銃を突きつけるのもね」

「一度死ぬか？」

僕は銃を手で払いのける、影で顔が隠れていたがその影が消えて顔がはっきり見えるようになった。

「時之 裕也、まさか君が日本に来るのは思わなかつたよ

「ロシアの支部でクロノスの武装を積んでいたさ、だが友が倒れたとなつちやあ飛んでくるさ」

「え…あの機体がロールアウトしてたんだ。

「で、本題は？」

「ブルーティアーズのブースターに細工されていた」

……それはとても僕を不快にさせる内容そつだね、イギリス政府はよほど自國を灰にしたいのかな

「俺の推測だが…それでもいいか？」

裕也はスポーツドリンクが入った容器を僕に渡しながら聞いてくる
妙に嬉しそうな表情をしながら

「さうさせてもいいよ……今は少しでも情報がほしい

「わかると思つがこれはお前を殺す為にやつた

「やつだひづね、結構恨みを買つよつた生き方をしてたし」

「やり方はこりうだ。まずブルーティアーズに細工をしかけてわざとお前と事故るようにする
もしふつかつた衝撃で一夏が死ぬなり重症になればそれでよし、なんともなれば機体をドカン！－代表候補生もろとも一夏を殺す……って感じだが、それと気になる情報があつてな」

僕はスポーツドリンクを飲んで医務室に配置されていた机の上にあつた携帯をもつ

「それは何だい？」

「つい最近ブルーティアーズが非公式でイギリス政府がドイツに渡したのさ、一時的には操縦者に無許可でな

「セシリアが簡単に渡すとは思えないけど

「セシは上手くやつたんだる、それより携帯なんか持つてどうつかぬ

「……いや、こんなに話込んで聞くのもあれだけど大丈夫なのかい

？」

いぐら学園とはいえ政府の犬に盗聴されることはあってもおかしくない

特に僕の場合は政府に恨まれる生き方をしてるし

まあ電話より直接話したほうがいいだろ？

「結界を張つてから見られることも聞かれる」ともない、じゃあ俺はロシアに戻るとするか

そう言つと裕也はすーっと消える

僕はベッドから降りて携帯の画面を見る

「あ…夕食の時間だ」

「…………あ、あの…一夏さん」

「やあ、大丈夫だったかい？」

僕は何食わぬ顔で食堂に向かって鰯味噌定食を食べていたら食堂が

ざわめきはじめて、微妙な距離で僕をまじまじと見る
そんな視線に鬱陶しさを覚えていたらミートスペゲティを持つて席
を探していったセシリ亞と出会つ

「わたくしの不手際で一夏さんに迷惑を」

「気にしなくていいよ、大したゲカでもないし」

僕は味噌汁をずっと飲みご飯を食べる
すると女子が2人、僕に近づいていた。

「織斑君！今日夕食の後つて暇？」

「……暇だね」

「じゃあ夕食の後付き合つてね！――」

そう言い残し2人の女子は帰つていった。
そういえばもうパーティーするんだっけ、またまにはリフレッシュ
させてもらいうとしようかな

「　「　「　織斑くんクラス代表決定おめでとう～～～」　「　「

「これは変わらないな……嬉しいことは嬉しいんだけど

「僕の為にありがと～…こんな素晴らしいパーティーを開いてもらつて」

「珍しいな一夏、パーティーとかの類は苦手だつただひ

「…まあね、でもせつかくだし籌も楽しみなよ、そこで緋和はしゃいでるし」

用意したお菓子に興奮した緋和はこつにも増してはしゃいでいる、
よつまどお菓子好きなんだね…今度作つてあげよう

「セシリ亞も気にしないで楽しみなよ」

「は、はー！」

やれやれ、今日は徹夜か…よほどイギリスは理解力が悪いのか、

そんなことをしたらどうなるかフランスとドイツを見たらわかるだろ？」「そうだね……経済的に苦しめるのもアリかな？」

「君が噂の織斑くんだね、新聞部副部長、一年の薫子です、はいこれ名刺…よろしくね、インタビュー受けてくれるかな？」

「僕でよかつたら答えるだけ答えるよ」

「……ひして始まつたインタビュー、今回ほんなん感じなのか不安だな

……

「じゃあまずは一つ、ズバリＨＳの起動時間は？」

「……まあ、約千時間らしいけど、詳しく述べ知らない

「えへわからないの？なら次の質問、ズバリ所持するＨＳの数は！」

「！」

「凄いことを聞いてくるな、まあ別に答えても問題ないし適当に……つて僕自身ちゃんと把握していないしね、結構難しいな

「僕が把握してる限りでは10機かな？」

「うわ…凄い」

「そんなに」

まあ驚くのも無理もないかな、僕だつてこんなに必要なのかよくわからぬ部分もあるしそれに零式と黒騎士に至つては渡されたりじこけび僕の手元にないし千冬姉さんの手元にない

「じゃあ最後にレジッヒー言お願いできるへん？」

「うちは盗聴してたんだがうしろでもさつてね」

「そうだね…僕にケンカを売るなら多少覚悟しておこてね
それと僕は守るためならどこまでも最強を田指して強くなる、だからあまり僕を怒らせないでね」

みんなポカンとしてるナビこれでいい

これで迂闊に手を出せないだらうね、といふえずイギリスへの攻撃はまた今度にしよう

「僕が答えられるのはこれぐらいかな？」

僕は近くにあつたジュースを手に持ちみんなを見る

「ああ、楽しもひよ」

「強くなつたね篠」

「また負けた…くそつ」

僕は早朝いきなり篠にたたき起しごとされ訓練につきあわされた。やつぱり天才だと痛感したね、どんどん強くなつてる…ただこれだけ強いと紅椿が追いつくのかな？

たしか紅椿の後継機の紅蓮椿があるけど果たしてどうなることか

「ねえねえ聞いた？2組に転校生が來たって」

「知ってるー！噂だと代表候補生らしいよ」

「ああ…そう言えば彼女が来る日だつたね

本当は迎えに行ひつかと思つたけど時間が無かつたし、彼女なら心配ないだろ

「久しぶりね一夏、元気してた？」

噂をすればなんとやら、道のド真ん中でボストンバック片手に仁王立ちをしている噂の転校生、そして僕のサード幼なじみである猫娘もとい鈴が変な笑みを浮かべて僕を見ていた。

フィムです、突然ですが孤高の一夏は更新停止になります。
理由は原作を見て、このままだと7巻にいくまでに一夏の性格を保
つ自信がないからです。

身勝手な理由ですみません

懲りずにまた新しいのをやります。その予告をします。

俺は誰よりも強く誰よりも優しくなりたかった。

「これが… I.S のか、装備するまで実感もてなかつたがすごいな

「そうですか、とりあえず説明しますと、バカ一夏専用の I.S『零
騎士』はあなたの過去の戦闘に関するデータをすべて閲覧し、装
甲や武装を厳密に厳選して造られた最高の機体です」

俺に与えられた最高の力、この力で俺は

『緊急事態が発生しました。再び日本に向けてミサイルが……』

『これは…人が起こしたものなのかな…?』

突然の悪夢、再び

「まさか…東さんが」

「あの馬鹿ならやりかねないでしょうね、しかし彼女は…」

「わかつてゐるよ、今あの人は意識がない、ならできる人間は限られるな」

「「織斑 千秋か（ですね）」」

『僕の弟はどれほど強いのかなあ、たかが数千発のミサイルなら5分で撃墜できるよね』

「零騎士の装備は?」

「今使えるのはBE-365『クロウ』が2丁、BE-01『タイタン』BE-44『ケルベロス』です、ミサイルは後20分で日本に到達します、突貫品ではありますが試作ブースターがありますがどうしますか?」

「…ブースターを付けてくれ」

「了解しました。それでは」

数千のミサイル、すべて落とさないと日本は

『バカ一夏、出撃してください、ブースターを射出しますから』

「…了解、織斑一夏…零騎士、出撃する」

俺は…強くなりたい

I・S インフィニット・ストラトス～強キ者 優シキ者～

といった感じです、本当に申し訳ございません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4333r/>

インフィニット・ストラatos ~孤高の一夏~

2011年8月31日12時21分発行